



腹の上の丸くなりたる猫揺らす臨月のやうな温き重みよ
下腹を拳でたく日もありき不妊治療の実りなきころ
例祭の太鼓の音がひびく日は胎児も踊る 陣痛始まる
陣痛の波受けながら咆哮すヒトも獣と思ひし記憶

天の埃 前中 映 東京

受洗の水の冷たさ

中村 恵*鳥取

「あすなる集」特選

仔羊の声とか目とか血液とか思わないからこんな打てる

この夏の終わりをしめす雨のつぶ纏ったローズマリーを摘みぬ
ローズマリーの雨粒ピツと払うとき頬に受洗の水の冷たさ

プラスチックのボトルのなかで湿気しっけって固まる重曹カタカタと振る
バルメザンチーズ、シンクの磨きあげ、山陰の冬のはじまりが好き

絵の具 磯貝恭子*新潟

赤1に黒2の比率で絵の具混ぜ今日悲しさの色を決める

パレットに残った絵の具をこそげれば今日の悲しみ無くなるのかな
キャンパスの少年の目に白少し置いて彼の命を表す

石鹼で絵筆を洗う手に残る油絵の具の匂いが好きだ
一日の終わりのニュース聴きながら絵を描くしんみりとした時間

記 憶 新屋希子 熊本

成人の集ひは三度延ばされて吾子の二十歳はたちが終はつてしまうよ

書物にも天地はありて春の夜の窓辺に天の埃をはらふ
苦しめばうま味を増すといふ貝を夜の氷庫にゆつくり殺す
街川の淀みを不意に抜け出してベツトボトルは海へと向かふ
働けなくなつたら飢えて死ぬだけの私の辞書に「老後」はあらず
草土手に他人ひとの不幸を読みをれば枕代はりのいろはすが鳴る

小さな豆腐屋 石田信夫*鳥取

「床下に入つとんさい」と男言う庭這う蛇を追い立てながら
くらぐらと長雨つづく八月を庭にくわつと百日紅咲く

山奥の小さな豆腐屋わが夜を酒宴にさせるな うまいじゃないか
朝五時に工場の掃除、草取りに励むおみなの背に汗滲む
釣銭を両手でそつとくれているそんな時代はもう来ないのか

ユムタ 義原富喜子 鹿児島

朝明けのウォーキングよりもどおりし夫つまひととの会話ありて楽しげ
さち薄き生徒なりしが子を連れて預けに来たる眼ざし優し
「徳之島の陽差しは痛い」と散歩中言ひて通れる関西の方
うす暗き畑の脇で男らのユムタがひびく島の朝明け
植多替へし千日紅をそよがせて確かに長月の風が吹きけり
(ユムタは世間話)

ポップアップのトースト 永田 恵美 福岡

落ちこんだ心よポンと跳ねあがれポップアップのトーストみたい
長雨のあがりて久しぶりに会ふ私の影が私を曳いて
保護犬のやうな黒き瞳をもてる子ら遠い砂漠で眠れる頃か
ペランダに昨日の服と明日の服はさまの今日にゆらゆら揺れる
てんき雨眉間に冷たい天の舌下りて私の味見をしてる

聞かぬ部署 水辺 あお 静岡

右脳より左脳酷使し生きて来ぬ後半生は右脳がんばれ

物あれば物にぶつかり人ゐれば人にぶつかる俺といふ奴
飛行機が飛びつつ部品一つつつ落とすかのごと老いに入りゆく
わが身にもわれの言ふこと聞く部署と聞かぬ部署あり聞かぬ部署増ゆ
手榴弾知らぬわれらは手から手にゴージャを投げて籠に納めぬ

外出の覚悟 高山 幸子*三重

容赦なき夏の陽射しをのぞき見て外出そとでの覚悟ととのえてゆく
庭すみのつくばいの水飲みに寄るオニヤンマ、鴨きよの来客
三歳が庭に寝そべり頬づえをついて眺める アリの行列
実り田に夜ごとひびける猪除けは義父の遺しし携帯ラジオ
コンバインを逃れ跳びだすひきがえるをすかさず鳶が脚爪にさらう

秋の長崎 酒井 恵子*長崎

アスリートは競技を終えしその口に息吐く間なくマスクをつける
コロナ禍に(長崎くんち)中止となり静まり返る秋の長崎
白露とて真夏の如き気温なり草叢の中蟋蟀跳ねる

米を研ぐ蛇口の水は涼やかに夏の終りを教えてくれる
夕暮れの空いっぱい鱗雲うつむき行けば秋に気づかず

蕎麦の馬鹿野郎 斎藤 嶺也 北海道

アスリートの感謝の言葉聞きあきた遠慮はいらぬ本心を言へ
真夏日のつづく北国何か変、すずめも飛ばずからすも啼かず
早魃で雑草さへも伸びぬのに蕎麦の馬鹿野郎ぐんぐんのびる
猛暑日のつづきたるのち洪水で野良の鼠は逃げおほせたか
地球号猛暑、洪水、大津波誰を乗するかの箱舟

あかき花火 新納 よし*栃木

雪山の連なるごとき入道ぐも東の空より西のはしまで
早朝に露を求めてトンボ飛び朝陽とともにそらへ舞いたつ
突然の雷雨を受けて林にはせみのぬけがら散るごとく落つ
長月に入りしばかりに彼岸花あかき花火がくさはらに散る
葉のかげに橙色の金木犀いまだ九月のはじめであるに

増水の川 岸下 澄江*鳥取

なにもかも歪んで見える猛暑日の五角形なる逆さのオクラ
星形のオクラの切りくち正しくて真っ白な種五粒並びぬ
いはいほのめだつ胡瓜をまるかじり鼻の奥まで漂う匂い
エアコンの部屋の窓開け降り続く雨が清めた空気吸い込む
引き込まれそうになるから増水の川を見ないで車走らす

熊除けの一斗缶 島山 タイ子 岩手

登山道に吊る熊除けの一斗缶たたかたかたかれ役目果たさむ

虫籠と麦わら帽子、捕虫網 夏の風情の子どもらいづこ
今にしてトクサの歯みがき懐かしやシヤリシヤリ感のよみがへる実家

人住まぬ実家の庭のコンクリの割れめにあまたスギナ生きをり
今日猫が選びしベッドは吾が部屋夕陽に染まるカーテンの裏

上川 盆地 阿部 則子 北海道

連日の猛暑は五輪とともに去り秋の風吹く上川盆地

キャベツ苗もらひ三株の一株が小玉に育ち千切りうまし

出し抜けて煙突つたひ響きたる鴉のこゑにびつくりしたり

月初め届くお米はへおぼろづき大雪山の水にて育つ

雨あとのけふの一日半袖が長袖になる九月九日

当 選 五十嵐 トシエ 新潟

半袖と長袖そろへて一日に着たり脱いだり気忙しい秋

商店街のレシート籤に当選すひと月捨てずに取り置きしもの

インソールを入れて歩けば土踏ます刺激を受けて気持良きこと

歩行器を使ひし友が杖に替へ日毎に快くなる気配の嬉し

清書前気を鎮めむと寝ころべば紐が目につく火災報知器の

家 族 愛 高野 哲司 兵庫

ツルマメの熟れし鞘より生まれゆくサウンドスケープ パタカラパチン

伊勢に生ふるイソアオスゲの生き甲斐は式年遷宮見届けること

ころころとムカゴのころがるヤマノイモふと想ひ出つおむすびころりん

石垣に「サイドランナー」伸びゆけばイソアオスゲの家族愛増す

「愛情の再創造」とふ肥料あげ我は育てるサワオトギリを

低水敷の鞘の熟れゆくツルマメはホームドラマの温かさ持つ

物々交換 星 キイ 新潟

心不全病名一つふえたるをもつけのさいはひ猛暑籠りす

「朝食後むかへに来よ」と言ふ義姉の一方通行体調よろし

一尺の長なす三こもらひ来て昨日のテレビのレシピをなぞる

とんぼ飛ぶ畑で物々交換すとなりの茗荷と手塩のセロリ

わが畑のセロリは隣家のスムージーわが家の味噌汁めうがの良き香

君 逝 く 佐藤 咲子 兵庫

溜池に水みちみちてやはらかき蓮の若葉は水面に添へり

蓮若葉みなもをぐいと離れたり工事現場を見たい様子に

朝食のはつかばかりのパン屑を待てる雀と不意に眼が合ふ

日の入りを見届け尚も去り難し淡路の島にひとつ灯ともる

八十の同窓会の案内に哲ちやんでーすと書きし君逝く

迷走 台風 橋本 正美 神奈川

ほつそりとした初さんま並べられ秋が来てゐる魚売場に

新聞の一面に輝く藤井三冠更に将棋の時代を作るか

食材は豊富にあるが昔の味少ないと言ふ百歳の叔母

秋あかね羽を休める電線はいつも一番細きに止まる

迷走の台風列島に上陸し北へすすみて月残しゆく

青空と蟬声 渡辺 京子 宮崎

コロナ禍の中で反対する人がゐるのにはじまる東京オリ・パラ

小四の吾ぐり石を一個づつ運び滑走路の補修しにけり

グラマンに追ひかけられて麦畑にしゃがみてゐたり頭に靴載せ

青空と蟬声とわが日焼け顔頭ち来ぬ八月終戦記念日
雨やみて三角錐の高千穂峰が西空に見ゆ青むらさきに

萩のトンネル 芳賀 テル子 福島

木々の名も友の名前も花の名も思ひだせずいらいらとをり
大型のバイクで遠乗りしてきたと女性介護士今日には明るし

「七半」で日本一周の旅するを夢と言ひをり女性介護士
我が町に熊出没を知らせくる防災無線に耳かたむける
宮城の萩咲けば思ひぬ若き日の青葉城跡の萩のトンネル

今日より彼岸 杉沢 千恵 東京

田の畔に彼岸花赤く並み咲きて長月の陽のやはくなりたり



「その二集」特選

ふんわり 高橋 梨穂子*新潟

発熱のこどもを膝に抱きながら風切るパラリンピアン見ている
ひたすらに茄子の乱切り練り返しようにやく風いでいくころあり
この傷は癒えてかならず森になるこの手は花に指先は鳥に
ふんわりとラップをかける ふんわりの力加減がわたしにもある
ごみ捨ての帰りに軽くなつた手を鳴らしちいさな音楽をうむ

よるひ戸を叩く雨音ひとり聴くこの夏の日々過ぐる寂しさ
秋色になりきれず木々は緑濃きままにはつほつ黄の実のぞかす
風通ふ梢にあまた実を生らせ銀杏はすでに秋を迎ふる
さはやかな朝を目覚めぬ冷房も扇風機も要らぬ今日より彼岸

非常の水 加々良 節子 佐賀

泥海の九キロ四方に音無けど取材のへりは轟々と飛ぶ
手伝ひは疎か声掛けさへできず水禍の友の難儀を知れど
「二度目なの、もう買はない」と被災家具前にへたばる友を見舞ひぬ
被災ゴミ満載したる軽トラが五台も続く街道筋を

家具、家電、畳も入れて間もなきにまたも襲ひし非常の水が
積まれたる家財にまたも雨は降りねつちよこ道を軽トラは行く

秋のひとひら 富永 恵美子*東京

ドイツでは男性名詞という豆腐 絹ごしみたいな性格が好き
スポーツウェアに着替えて掃除洗濯す競技と思えばなんてことない
君とわれやつぱり全く違う人 似合うマスクが全く違う
蟬の翅ではなく翅だけの蟬と呼びおり秋に残るひとひら
こんな日もいいことはある 残業のわれを励ます半額惣菜

秋空たかし

秋山幸子 千葉

屋根に落ちポタンポタンと柚子の実は合奏してをり明るき月夜
甘い香の花咲くニオイバンマツリ蝶もわたしも吸ひよせられぬ
幕前での母との対話尽きぬ午後秋空たかしトンボが飛びて
秋分は母に会へると待ちどほし此岸と彼岸近き日なれば
亡き母と腕くみ歩きしこの道を今宵も照らす上弦の月

尾根を行く

秋山美江 愛媛

湿原にワタスゲ揺るるのどかさよ木道行く歩の友と揃ひぬ
頂きに威武揚々とケルン佇つ午後入山の憂ひを拭ふ
咲きて良しほほけて愛し去りがたし池を縁取るチングルマの白
尾根を行く遠く山並に白映えてホルスタインのごとき残雪
白馬から朝日岳へとイワギキョウツメクサ・クルマユリ・サクラソウ
ひたすらに登るは辛しノコギリの尾根また辛し息つぐ花野

一と六の日

阿部直子 新潟

三百余の歌より選ぶ六首なり今日は最後のページから読む
修正ペン手にする彼のいたづらかま青の空にひとひらの雲
一と六の日に立つ市の研ぎ屋さんに包丁預け梨買ひに行く
生きをらば吾も言ふはず つれ合ひのグチを並べて友は帰りぬ
ザリザリと鳩舎を浚ふ音にまじり鳩を制する低き声のす
群れで来る中学生に追はるること一本道を後もどりせり

レスパイト

柴田有里*愛知

ただひと夜ひっそりと咲く乳白の月下美人を写真にとどむ

チヨキチヨキと黄色い画用紙まんまるにくり抜き作る中秋の月
真夜中に衣擦れの音カサコンと聞こえてドキリ義母の部屋より
駆除されるべきは我らかウイルスか月でうさが高みの見物
長考し出した答えのレスパイト敗北感が我が身を襲う

ミシンの音

大池アザミ*兵庫

雑巾を何枚も縫う駆動するミシンの音を体にあてて
来客が帰った後から犬吠えるいいよわたしもそんな気分だ
皿洗う手順がいつもと違つて今日ほどこへと向かつているか
語気荒くつめ寄る人に針さしてぷしゅんと小さくすはめてみたい
リモートで仕事の息子「行つてきます」低くつぶやき二階へ出勤

コロナ明けたら

長瀬慶一郎*福島

尾身医師の眉間の皺がもの語る経済重視の政治家の壁
コロナ禍に自宅で命落とすとは津波を受けたほどの衝撃
朝コロナ検査診察、午後ワクチン闘っている町医者たちも
東京に就職する子の家探す津波 洪水受けない土地に
三省堂書店の地下でドイツビールまた飲みたいなコロナ明けたら

ノーマスク

川越三紀子*宮崎

「大谷の球より速い」と流れゆく寿司の動きを夫は楽しむ
知らぬ人に見られるなあと言し買ひ物の後気づくノーマスク
老犬が私の傍へやって来る遠雷とおいがらみの近づき来れば
陽の当たる方へ方へと伸びてくる白百合は首の細長き鶴
「食べるものある?」と来る子が三日来ずはちきれそうになる冷蔵庫

胡桃の大樹 大 桃 小やゑ 北海道

胡桃の木垂るる一枝持ち帰りこの木の土地を買ふと決めた日
十年の月日眺めし胡桃の木ズシンと家を揺らし倒るる

秋晴れの静かな朝に地震のごと屋根に倒るる胡桃の大樹

胡桃の木倒れて失ふ秋の音小鳥もりすも実の打つ音も

青々と光りそそぎし胡桃の木みな集りてパーベキユーをせし

おいてけぼり 樺 か 乃 広 島

私だけ狙つてゐると思はする雷鳴とどろく長き夜なり

波立たぬ余生を願ふこの頃にあつけらかんと犬が寄り添ふ

居れば吠え居なければさびし 犬のやうな家族を想ふコロナ禍の今

水張田のやうにしーんと呉の海おいてけぼりのカモメが一羽

息さらし一人を呼びに行くやうにカモメの一羽振り向かせたい

七月の鮎 稲 吉 裕 子*愛 知

箸先に鮎の片身をほぐしつづつ夫の釣り談義しばらく続く

透き通る背びれ美しおとり鮎を放つ長良の水は清けれ



焼き上げし七月の鮎白き身を囲む夕餉に母は在さずいま

一膳のごはんさつくり食べ終えて注ぐ緑茶に茶柱が立つ

化粧水ひんやり肌になじみいて束の間の午睡愉しみており

島の郵便夫 丸 山 克 介 鹿児島

岩風呂の岩に凭れて動かざる爺のひげ面不意にあくびす

まつすぐにわれを見る目のまばたかずちあきなおみのやうな赤子よ

手紙一つ石垣越しに渡しある毛深き腕の島の郵便夫

島を去り都会に暮す子の元に行きたる証し空家三軒

一族の酒酌み交はす砂丘墓地、奄美航路の船近く見ゆ

ノーブレス 福 田 春 子 福岡

三合の糯米ほんのりあかく染む五〇グラムの小豆の色に

赤き字のマジックすこし滲みをり「若松」と書く潮風西瓜

十メートルをノーブレスに泳ぎ来て息つぎに吸ふ初秋の空気が

銭湯の湯船に居ればこの街に住みぬし頃の苗字で呼ばる

ひとすちのくせ毛をはさみぱたり閉づ新刊歌集を半ば読みきて

みずひきの花 丸 山 淳 子*東京

プランターに幼き塩辛とんほいて観察している草抜く私を

夕暮れにもどり来たれる黒猫の背にみずひきの花のいくつか

高架なるモノレールの窓に明かり満ちカーブして行く夜空の中へ

幅広き石の階のぼり行く老女は端の手すりにすがりて

彼岸花群れ咲く岸の果てまでも行けば会えるか亡き人たちに